

## 発達障害への薬物治療—専門クリニック 23 年の経験から

公益社団法人発達協会王子クリニック 石崎朝世

発達障害への主な対応の第一は、子どもがもっている発達する力の後押し、すなわち、良い生活リズム、感性や感覚を育てる遊びや運動を促す、また、拒絶されている感覚を持たせたり、自信や、やる気を失わせたりするなどのマイナス要因を作らないこと、第二は、社会参加に必要な行動を教え、情緒をコントロールできる力をつけ、身辺自立を図るといった療育的、教育的な関わり、そして、第三が、状況を十分理解した上での薬物治療です。また、どんな時も、生涯に亘る生き生きとした社会参加という大きな目標を持って関わることが大切です。決して特性をなくす、あるいは発達障害を治すことではありません。発達障害を持つ人は、優れたところを持っている可能性が高いという視点も必要です。そのような視点の専門クリニック 23 年の経験から、薬物治療の話をしていきます。

以下、主な標的的症状別に、考えられる病態とそれに使われる主な薬をお伝えします。

### 1) 感情のコントロールがうまくいかない場合

自閉症スペクトラムがあって、見通しがつかず不安がある、刺激に敏感すぎる場合、一般的には、脳神経系ドパミン機能を低下させることが主な作用の抗精神病薬を用います。フラッシュバックが関連する情緒不安定も多いですが、脳神経系セロトニン作用を増強する SSRI が効くこともあります。

ADHD による感情コントロール不良には、主に抗 ADHD 薬が使われます。

ときには、てんかんと関連した情緒不安定性もあり、考慮が必要です。

また、情緒不安定に、漢方薬をしばしば単独あるいは併用して使います。

### 2) 多動、衝動性、不注意が目立つ場合

抗 ADHD 薬が効果を示すことが多いです。この症状のために失敗を繰り返す、学習もできない、怒られてばかりのときは使って良いと思います。ただ、ADHD の衝動性は好きなことを独創的に行うきっかけにもなりますし、注意が他に飛びながらのひらめきも優れた能力ともなるので、良いところへの注目も大切です

なお、抗 ADHD 薬には、服薬後約 12 時間比較的強力な効果を示し、主に脳内ドパミンを増加させるメチルフェニデートと、24 時間比較的緩やかな効果を示し、脳内ノルアドレナリンを増加させ、ドパミン機能も高めるアトモキセチンの二つがあります。状況により、選んで使います。両者併用もあります。

### 3) 睡眠障害

生活の改善でよくなる場合は薬物治療の対象です。興奮や不安で眠らない場合は、興奮や不安が著しい場合の薬に準じますが、そうでない場合、メラトニンやその作用を持つ薬(ラメルテオン)を用いることが多いです。いわゆる入眠薬もときには使います。

### 4) 気分障害、統合失調症様症状などの精神症状

何らかの誘因があることが多いですが、上記精神科的合併症が起こってくるのが稀

ではありません。病態を考えつつ、抗精神病薬、抗うつ薬などを用いますが、当然ながら精神疾患と考えられても環境調整が重要であることが多いです。

セミナーではこれらを概観しつつ事例を紹介しながら、解説いたします。